学ぶこと多し

親の素顔とは違っていわゆる盛大な結婚式になっていた。祖父母から新郎は三代、新婦も福祉関係のせいか日本社会事業大学長ら教授連、細川夫人もまじる三百人。大分からはある女性と私。

彼女に出席のわけを尋ねた。「新郎、あの子の最初の産湯を使ったのが私。こんなに小さくてね」。いとおしそうに掌（てのひら）を丸めて当時のしぐさをされる（新郎は別府市生まれ）。この方を一番に招いた母の深い思いがしのばれてならない（熊本市慈愛園・潮谷夫婦）。

肝炎になって数年、新しい主治医は超音波検査のエコーに映る私の肝臓の病状を説明するが、分からない。「では私のと比べましょう」と、ご自分のを映して二つ並べる。分かる、よく分かる。私のは尖端がない、繊維化している。健康体のはピーンとがっている。若き医師の何気ないこの的確な動作（別府市鶴見病院・石松医師）。

比較は学問研究の最重要の方法論。比較によって人も自分も一番納得できる。明白

な差異を通じて問題の本質が開示されるからである。本当に分かっていなければ比較法を使いきる力は生まれてこない。

若い潮谷夫婦は愛児の新出発に当たり、その生命の最初の出会いを重視した。生命は自動的に育つのではない、無数無限の人と物がかかわっている。それが生命の歴史。その歴史の自覚が人間らしい人間の証(あかし)だ。

石松さんから、潮谷さんからも、改めて大事なことを教示された。若者から学ぶことはうれしいことのみで恥ずかしいとは思わない。老いの日は収穫の季節にちがいない。

（一九九四年六月十日）